

# 常磐

TOKIWA

vol. **6**  
Feb. 2006



GORO

情報メディアセ  
Media and Information Technology



情報メディアセンター



国際交流語学学習センター



出席者(右から)

- |          |                       |
|----------|-----------------------|
| 鈴木 陽一郎 氏 | 東通産業株式会社 執行役員 社長室 副室長 |
| 宮田 光朗 氏  | 財団法人日本英語検定協会 専務理事     |
| 糸賀 茂男    | 常磐大学常任理事(司会)          |
| 阿部 昌信    | 情報メディアセンター長           |
| 川島 淳一    | 国際交流語学学習センター長         |

特集 | 座談会録

研究教育支援の取り組み

# 常磐大学のめざす 「情報化」「国際化」とは何か

2005年4月に国際交流語学学習センターが、  
5月に情報メディアセンターが相次いで開設されました。

これは常磐大学の研究教育支援の一環であり、  
本学の「情報化」と「国際化」のための新たな環境作りへの第一歩です。

そこで両施設利用の現状や、その中から生まれた課題、

そして常磐大学が目指すべき将来の姿などを、  
学内外のそれぞれのお立場から語っていただきました。

# 最先端機材を装備した両施設の印象

**糸賀** 常磐大学の研究教育支援の取り組みの一環として、それぞれ最新機材を装備した情報メディアセンターと国際交流語学学習センターが、今年相次いで隣接して開設されました。今日は、その開設の背景となる本学の情報化と国際化について、様々な意見を伺いながら、将来に向けてあるべき姿がクローズアップされればと思っております。まず、これまで総合情報センターと言っておりました情報メディアセンターの阿部センター長と、国際センターという名称を変え再出発

しました、国際交流語学学習センターの川島センター長から、現在の印象などを簡単にお話いただけますでしょうか。

**阿部** 情報メディアセンターのコンセプトは、「情報化時代にふさわしい創造性と表現を追求する」ということで、主な狙いは「ロードバンド化時代」に対応できる人材の育成です。開設して半年経ちましたが、情報化に向けての意識の改革という面ではなかなか厳しいところがあるなという印象です。

**川島** 国際交流語学学習センター

社会のニーズは  
確実なITスキルを身につけ  
自ら考え問題処理できる  
力を持つ人材です。



情報メディアセンター長

**阿部 昌信** 被害者学研究科/人間科学部教授

北海道大学大学院教育学研究科修士課程修了。  
専門:社会工学、行動計量論、情報処理。  
日本行動計量学会会員。  
人間科学部助教授を経て1992年4月より現職。

の前身である国際センターは7年前に再開され、現在に至るまで、国際理解を深める環境作りのための様々な地道な作業をしてきました。今年4月に名称を変更し、それまでとは雲泥の広く素晴らしいスペースに入ることになり、現在はあのスペースをいかにして人で埋めるかということ而努力しているところです。

**糸賀** 常磐大学の2つのセンター長からお話をいただきましたが、学外の立場から宮田様と鈴木様からも、大学の印象なりを一言お願いいたします。

**宮田** 日本英語検定協会で専務理事をしております宮田と申します。今年の5月下旬に大学に伺い、センターを見学させていただきました。

て、他の大学から見ましたら本当にうらやましい設備だと思いました。本日は国際化について英語というキーワードから、いろいろお話できたらと思っています。

**鈴木** 私も設備を拝見させていただいて、非常にすばらしいと思いました。私は教育設備を構築するシステム等を設計施工している東通産業株式会社という会社におります鈴木と申します。近年は学校のコンピュータに伴い、PCとLLを融合したコールシステムといったものを様々な学校で導入させていただいていますので、構築する側として、他大学の構築事例など交えましてお話させていただければと思っています。

## 「情報化」における現状と問題点

**糸賀** それでは次に現在どのような状況にあるのか、そしてその中の課題などをお話いただきたいと思っています。最初に情報メディアセンターについてお聞きしたいのですが、

**阿部** ご承知のように情報化が進み、企業ではハード面・ソフト面での人材確保が活発に行われています。しかしながら、本学卒業生の主な就職先となる多くの中小企業においては、コミュニケーション力を持ち、自ら考え提案し、問題解決

をしていく能力を持った人材が不足しているのが現状です。そのような企業や社会の要求に 대응するために、センターはパソコン380台を設置して、ITコーディネーターの育成に力を注いでいます。また、1兆円産業と言われているブロードバンドに対応したコンテンツ制作のために、Mac教室とバーチャルスタジオを新しく作りました。常磐大学が目指す情報化は、このITコーディネーターとコンテンツクリエイターを育成することにあります。これを実現するために必要なものは、まず一対一の教育と自学自習のできる環境作りです。いつでもどこでも自分の理解度に応じて学習できるeラーニングの環境が必須です。現在、パソコンのある教室にはすべてCAI教育システムが導入されており、教卓から全学生の学習進捗状況が把握でき、学生に対してきめ細やかな指導が可能になっています。センター全体には無線LANが完備されていますので、どこからでも自分のPCと接続して学習できるようにしています。

**鈴木** eラーニングシステム導入など、いつでもどこでも学生が学習できるようなシステムになりますと、教員の方もいつでも対応する体制になっていなければならなくなつて

しまふんですね。他大学で実験されているのを見ますと、教員の方の負担がかなり大きくなつています。しかし学外へのeラーニングが整いますと、現役の学生だけでなく、社会人の方も学習できることはうれしいですね。

**阿部** 最新で、かつ学ぶ側にとって最適な自学自習を可能にする環境をつくるためには、継続的な情報インフラの整備、ネットワークとITへの設備投資も必要です。これからの課題として4つほどありますが、1つは情報の発信基地を作るといふこと。インターネットを通じて、積極的に常磐大学はこんな教育・研究・活動をしています、という情報の発信をして、学生や企業への関心を喚起していく仕組みが必要です。2つめは、著作権や大学特有のセキュリティを取り扱い、行政、企業、地域住民との連携がしやすい環境作りをしていくこと。3つめは、ウイルスやサイバーテロに対してのセキュリティ対策や、個人情報への取り扱い等々への対応強化。4つめは、教職員のデジタルデバイスなどをなくすための施策と支援です。

**鈴木** 私自身、企業に入ってからPCを使ってプレゼンテーションする機会がかなり増えてきたという実感を持っていますから、マッキントッシュ

のOSやCGなどの分野に着眼されて、機材を活用する機会を増やされたのは、すごくいいことだと思います。これまで実際に企業で必要とされてきたスキルでも、なかなか大学で勉強することができませんでしたが、また課題として出てきましたセキュリティ問題というのは、どこかの大学でも大変です。最近私の知っている大学でも、学生がウイルスを内部に持ち込んでしまひ蔓延してしまうというような内部的犯行に近いような事例もありました。今後は外と内とのセキュリティシステムが必要になってきますね。

**東通産業株式会社**  
**鈴木 陽一郎** 執行役員 社長室 副室長  
 1989年4月 東通産業株式会社入社。  
 1998年4月よりSI営業部主任。2000年4月より営業開発部 課長代理。  
 2001年4月より執行役員 営業開発部 課長代理。  
 2005年4月より執行役員 社長室 副室長。

コンピュータも語学も学ぶという  
 コラボレーションから、  
 新しいものが生まれてくるはずですよ。



情報メディアセンター



コールラボ

42台のパソコンを設置。ネイティブスピーカーの音声波形として見られるソフトや、英語をはじめとする学習ソフトが揃っており、語学学習のための機能が充実しています。



PC教室

教員用と学生用のパソコンはLANで接続されており、共通の画面を見ながら授業を行うことができます。情報関連の授業をはじめ、一般の講義やゼミなどeラーニング用としても使われています。

# 「国際化」における現状と問題点

**糸賀** 情報化についてのお話を伺いましたので、今度は国際化の話に移していきたいと思えます。川島センター長から国際交流語学学習センターについて、現状や課題などお願ひします。

**川島** 10年前に国際学部が開設されましたが、当時は国際センターの活動を学内事情で休止しており、国際センターもない語学研修のチャンスもないということで、学生から多くの不満がありました。それでこれではいけないと7年前に国際センターを再開しました。活動目的の一つは、国際交流を通して国際

理解を深めるということ、当時国際協力学科もございましたから、学生の国際ボランティア活動の支援を始めました。さらにネイティブの教員の方にお願ひして、毎週1回お昼に英語で話す「Talk Time」というものを企画し、後に中国語も加わるようになりました。一方でバイリンガルのニュースレターも年4回発行し、センターの活動を広く知らせる努力をしてきました。

また、もう一つの目的が教育交流というもので、語学研修のための機会を得るといことがありました。幸いにも全米の州立大学のトップ

## 国際交流語学学習センター長 川島 淳一 国際学部教授

ミシガン州立大学大学院博士課程修了。(Ph.D. in Communication)  
専門:教育・国際コミュニケーション。  
元カナダ・アルバータ教育放送協会教育番組局長。  
前放送教育開発センター教授。1996年4月より現職。

既成概念にとらわれずに、  
真の国際理解のための  
好ましい環境作りを  
していきたいですね。

プ10に入るカリフォルニア大学アーバイン校と提携することができました。今年には多数の参加希望者があり、ホームステイ先のアレンジメント等で大忙しです。短大については長い間語学研修をやってきましたが、キャンパスのない語学専門学校でしたので、2年前にキャンパスのあるイギリスのチチェスター大学と提携しました。一方、中国語に関しては、中国人の教員が非常勤時代にボランティアで、中国語を履修している学生を中国文化研修として4回ほど中国に連れていってくれました。毎回30名くらい参加する状況でしたので、これは正規の語学研修にしようということで、北京第二外国語学院という語学で高い評価を持つ学校と提携しました。

2005年4月にスペースは10倍の広さになりまして、ピンク色のカーペットのスペース(International Exchange Area)では毎日、交換留学生を中心とした英会話活動、隣のグリーン色のカーペットのスペース(Language Learning Area)では、語学学習ソフトを完備したコンピュータで自学自習、ということで会話活動から語学学習という流れを意図的に作りたいと思っています。

## 国際交流語学学習センター



### Language Learning Area

最新のパソコンとAV機器を設置。すべてのパソコンに語学学習教材がセッティングされ、目的別に個人のペースで学習ができます。また、インターネットで海外の大学について調べることができます。



### International Exchange Area

7カ国語の語学学習教材、英字新聞、雑誌、留学関連書籍があり、自由に閲覧することができます。また、お昼休みにはネイティブ教員と英会話や中国語を楽しむ「Talk Time」を実施しています。



### Small Group Learning Booth

個人や少人数での使用が可能で、衛星放送・ビデオ・DVD・MD・PCを利用して語学学習ができます。衛星放送はクロースドキャプションにより、字幕つきでみる事が可能です。

**糸賀** 国際理解を深めるための活動内容等のお話でしたが、語学教育に携わっていらっしゃる宮田様、どのような意見がありますでしょうか。

**宮田** 日本英語検定協会ではケンブリッジ大学とコラボレートしていろいろな研究を重ねていますが、その中で分かっているのは、日本人が英語のできない問題点は、残念ながら話すだけではなくて基本的な文法やリーディングなど、4技能すべてなんです。アメリカの大学の先生からもよく聞く話ですが、日本人の留学生で落第者が多いというんです。なぜTOEFLで600点を取って入った大学でと疑問に思ったのですが、いちばん大きな問題がディベートができない、リーディングができない、ライティングができてレポートの内容がお粗末だということでした。

そこで考えさせられたのは、学生が国際理解を通して学んだことを、社会に出た時彼らはそれをどう活かすのか、またどのように活用されているのかという議論が多くの大学で欠けているのではないかと、ということですね。なぜかと言いますと、ほとんどの大学生は卒業後日本の社会の中で活躍するのです。話すことよりリーディングやライティングのほうが使用頻度が高いわけです。ま

た日本人や日本の文化を英語でどう表現したらいいのか、どういうふうな外国の人とコミュニケーションするのがいいのか、というところも少し欠けているような気がしています。

**川島** そうですね。私の経験でも、表現は悪いですが、海外では口で喧嘩ができるのも大切だけれども、文書でも喧嘩できないと生き残れないと思います。現在、アメリカの提携校からの交換留学生の条件は、TOEFL500点ですが、550点取れないと卒業できません。本学の学生はESLという英語の研修コースのレベルで正規のコースを取るのには困難です。現状のキャリアグラムを見ても英語の授業数が全学的に少なすぎる印象がありますし、もう少し学科として組織的に、例えば4年の間に英検準一級を何十人育てる、というような特訓のようなことをしなければだめだと思いますね。

**宮田** 確かにそうだと思います。やはりもつと基礎的な学力をきっちり積み上げて、さらにそこに専門的なアドバンスを、どういうかたちで入れ、花開かせてあげるかということを考えてはいけませんね。卒業するまでに学力のレベルがどのくらいあるべきなのかということを目標にすえ、このような立派な設備をカリキュラムの一環としてどう

財団法人日本英語検定協会

**宮田 光朗** 専務理事

1971年4月エッソ石油(株)(現:エクソン・モービル石油)入社。1999年5月(株)旺文社入社 社長室長 取締役。2001年7月(財)日本LL教育センター入社 専務理事。2002年4月(財)日本英語検定協会入社 事務局長。2002年7月常務理事に。2003年7月から専務理事。

社会では話すことより、リーディングやライティングの英語のスキルの方が活用されます。



使い込んでいくか、という具体的な取組みが必要だと思えます。さらに先ほど阿部先生のお話にデジタルデバイスという先生方のITスキルの格差の話が出ましたが、これは大きな問題ですね。1時間でやったものが実は10分ですむというようなことがありますから。ITの進化は日進月歩以上の早さです。教職員の方に、ITに対して、より高度で深い知識を持って利用してもらいませんと、学生の能力もあがっていかないのでしょね。

**阿部** 国際化ということで英語の能力の話が出ていますが、情報というのがまさに国際化なんですよ。ナンバーバルコミュニケーションという言葉もありますように、インターネ

ットなどで画像やデータを見せると言語はなくてもそれだけでどんな人種にも通じますから、情報はボーダレスで、国際化の最たるものだと思いますよ。

**鈴木** コンピュータの世界も基本言語はやはり英語ですね。他大学で見学させていただいた時に国際化教育と情報化教育の接点だと思いましたが、イラク戦争などのようなナマの情報やCNN等で仕入れてきて、そこから時事の英語を勉強しながら、パソコンを使ってヒアリングしてワードに起こしてメールで送ると、語学の勉強もしながら情報の勉強もしているという連続した流れで学習していたことです。双方非常に繋がっているんですね。

# 学校法人として考えるべき「情報化」と「国際化」の前途

**糸賀** ここまでのお話で、それぞれの現場の現実や課題が興味深く出てきていますが、限られた時間ですので、今日のテーマに対する展望について、一言ずつお願いしたいと思います。

**阿部** 今後の展望ですが、すでに小中高校での情報教育が本格化してきており、より高度で実践的な教育に重点を置かれるでしょう。さらにブロードバンド化の進歩により、働きながら学べる環境や他大学との単位互換など、ポータルレス教育が盛んになっていくと思います。そして、大学は学生だけの教育

施設ではなく、地域住民等々の情報ポータルサイトの役割が増してくると思われそうです。

**鈴木** これまで社会の技術や企業で売れるものは、10年スパンで変わってきています。今後学校や自宅で10年くらいコンピュータを触り続けている人が増えてきますと、突発的に何か新しいものが出てきたりしますから、これはすごく楽しみです。今の子供たちは最初からWebのある環境にいますし、こういった充実した環境があれば、常磐大学から新しいビジネスが生まれてくる可能性も大きいですから、期待

は大きいですね。

**川島** 将来的にはネイティブのアドバイザーを常駐させて、学生がいつでも相談にのれるような形にできたらと思っています。施設が立派なぶん学生の能力も比例していくように、国際交流に好ましい環境作りと、徹底した語学教育を目指していきたいですね。

**宮田** 学生にとって大学の中の情報メディアセンターは英知の場所です。決して新しいメディアのツールだけの場所ではないと思うんですよ。その英知の中心のセンターをいかに利用しやすくするか、どのようなアシストをしてあげるかということが大切だと思います。確かに卒業時にスキルを持っているのはいいことですが、正直言って企業はスキル人間だけを求めています。採用担当者は学生の持っている素質はどういうものかをよく見ているんですね。スキルだけ磨くのであれば専門学校でいいわけです。

**糸賀** 確かにそうですね。学校法人常磐大学の情報化と国際化について、いろいろとお話いただき、私にとっても様々な面で考えさせられる良い機会となりました。こういった座談会が多くの分野でも行わ

れ、我々にフィードバックされるようなチャンスになればと思っています。今、お話にありましたように、常磐大学は社会に向けて様々な形で学術的なものを発信する基地であるべきで、そうでなければ大学の生命は保てないということも改めて痛感いたしました。本日の内容を念頭に置いて、今後も努力してまいりますと思えます。本日は貴重なお話しをありがとうございました。

センターの現実を大学の世界にどう投げかけていくか、ということをお考えなくしてはいけません。



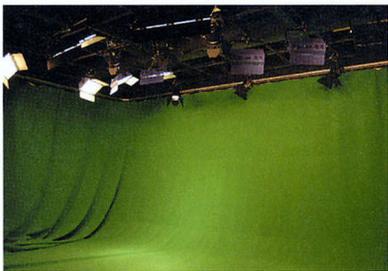
常任理事(研究教育支援担当)

**糸賀 茂男** 人間科学部教授

慶應義塾大学大学院文学研究科史学専攻博士課程修了。  
専門:日本中世史、古文書学。  
日本古文書学会評議員。茨城県文化財保護審議会委員。  
県内外自治体史編纂に従事。1998年4月より現職。



情報メディアセンターのバーチャルスタジオは、実写とCGを高品質に合成できる最先端の映像空間です。上の写真は合成画像です。



情報メディアセンターと国際交流語学学習センターの施設紹介はP11～12に掲載。

## 「私の心理学」を目指して

「私の心理学」の発見、それは、私が心理学を学んで以来の長年の課題である。この課題の解決には、残念ながら、まだまだ至っていない。しかし、その課題を調べるための視点を見付けることはできた。それは、徹底的行動主義をその哲学的基盤とする行動分析学という学問の視点である。

私がこの学問にはじめて触れたのは、私が学部生のときであった。当時、自分の抱いていた心理学のイメージと行動分析学の視点は、まったく重ならなかった。そのようなとき、その学問をもっと学んで、その視点のなんたるかを知ろうとするつもりはまったくなかった。むしろ、反抗的にその学問を避け、その研究者を誹謗し、ひたすら自分のイメージにあった心理学を、表面的にいくつ

かかっただけであった。

そのようなことに満足できるはずがなかった。大学院のときに、心の追求をいったん棚上げにして、動物の行動を対象にした実験的な研究に没頭した。この経験から、私は、「心」ではなく、「行動」についての自然科学的視点が心理学に必要であることを実感した。

常磐大学の教員に赴任してから、多くの学生諸君と関わる機会を持った。彼らとの関わりをとおして、私が学んだことは、やはり「行動の科学」としての心理学の重要性であった。

高校を卒業してきた学生諸君の多くは、たとえ18年そこそこの人生経験であっても、彼らの「心」を語ることはできず、彼らの「心」を語ることはできず、彼らと議論して、彼らの「心」の捉え方に満足することができなかった。常識的な、だれもがわかつたつもりになっている、「心」の捉え方に反発を感じたのである。また、その解釈が、一見論理的に見えても、かなり思弁であることにも腹がたつことがたびたびあった。なんら実証的な裏付けがないのに、「心」を説明する。また、人の行動を「心」で説明する。しかし、実際は、学生諸君が悪いわけではまったくないのだ。

「心」をなにか目に見えないもの、私たちの行動を駆り立てる何かとする見方は、人類の歴史の古くからある。科学が発展したと言われる今日であっても、そのような見方が今でも存在する。最

先端の研究をしている科学者や技術者が、いくつかの神社を参拝して、ロケットの打ち上げ成功を祈願する。ここに人のヒトたる行動があるのであるが、常識的に、私たちは、それを、「祈願すると安心する。安心すると心が落ち着く。心が落ち着くと適切な行動をとることが出来る。適切な行動をとることができれば事が成る。」と説明する。このような説明を、私たちは、普段、平気で行っているのである。この説明の不十分さ、不正確さに普段の私たちは気が付かない。高校を卒業したばかりの若い学生諸君だけの傾向ではないのである。心理学の中にも、そのような説明をして、「心」がわかったかのように説明する領域があるのだから、学生を責めるわけにはいかない。

私が、動物・学生諸君、そして、自分の子どもとの関わりから学んだことは、行動を科学することの重要性である。それは、環境との関わりによつて、私たちの行動がどのような影響を受けるのか、それを、心的過程を介することなく徹底的に調べて説明することの必要性である。これを痛感していたとき、私は、学生時代に学んだ行動分析学と再び巡り会うことができた。

偉大な行動分析学者である B. F. Skinner の論文や著書をいくつか読むことで、目からうろこがとれる思いがした。そこには、私が、多くの人や動物から学んだ「私の心理学」なるものが、文章として明確に表現されていたのだ。驚きと

喜びで感極まる思いであった。

私は、今、行動分析学の知見を自分の研究や教育に活かすことに喜びを感じている。その知見は、単に、どこかの誰かが記した教科書的な、常識的な「心」の解釈ではない。私が人生で学んだことに合致した、科学的な心理学である。したがって、その解釈は、未だ狭い視点といえるかもしれない。その知見を、人や動物のいろいろな行動に拡張して、その有効性を検討している。生きとし生けるものの行動、そこには、まだまだ未知の分野が広がっているように思える。「私の心理学」の発見、その悟りを求めて、今後も悩みながら研究を続けていくつもりである。

常磐大学  
人間科学研究科 /  
人間科学部 教授  
**森山 哲美**

Profile

慶應義塾大学大学院社会学研究科心理学専攻博士課程修了。心理学博士。専門：行動分析学、学習心理学、比較心理学。日本行動分析学会元理事。人間科学部助教を経て2000年10月より現職。



# 保育学の奥座敷

私が大学に入學した頃、保育学は社会の片隅でひっそりと育まれていた学問でした。

今や保育は白昼痛いほどの目に晒される専門領域になってしまいました。保育者養成、子育て支援とフル回転の毎日を送っておりますが、今日は保育学の奥座敷(子どもの心の世界)へ皆さまをご案内させて頂きます。



常磐短期大学  
幼児教育保育学科 教授  
**江波 諄子**

## Profile

お茶の水女子大学家政学部児童学学科卒。ペンシルバニア州立大学大学院人間発達学部児童発達と家族関係学科修士課程修了(M.S.)。専門:保育学。場の保育理論で日本保育学会より奨励賞受賞。短期大学助教授を経て1997年4月より現職。

### その1

### ハサミ

私は幼い頃  
ハサミが大好きだった  
幼稚園で使った以来 気に入った  
そして  
なんでもハサミで切るようになった  
幼稚園のカートン 木  
挙げ句の果て  
先生のスカートまで切っていた  
自分の力で物を小さくできるのが  
よほど楽しかったらしい  
ある日  
幼稚園の運動場で  
だんご虫を 三匹つかまえてきた  
あろうことが 私は  
それをハサミで半分に切ってしまった  
私は 初め  
「わーい 六匹に増えた」  
と喜んでいたら  
しかし数分たつと  
だんご虫は動かなくなった  
私は大泣きした  
「だんご虫が動かなくなったー!」と  
それ以来 私は  
ハサミで遊ぶことはなかった

### その2

### ゆきちゃん

四歳のゆきちゃんは  
色の白い可愛い年下の女の子  
私とゆきちゃんはいつも仲良し  
たまに 喧嘩もしたけれど  
次の日には また仲良し  
ある日  
ゆきちゃんの家へ遊びに行こうとする  
母に止められた  
「どうして?」  
と尋ねると  
「ゆきちゃん 病気だからね」  
と言われた  
私は 昨日の喧嘩が原因だと思った  
その日は とても淋しかった  
次の日も 次の日も  
母は「だめ」と言った  
「こんなに長い間 病気のはずはない」  
と 私は思った  
ある温かな日  
私の家も ゆきちゃんの家も  
布団を干していた  
私がのぞくと ゆきちゃんは  
布団の上に気持ち良さそうに  
寄りかかっていた  
私は そばへ行って 話をした

母の言ったとおり ゆきちゃんは病気だった  
久しぶりに会えた喜びと

私より小さな子が病気だという事実  
私の胸は痛んだ

そして

ピアノの発表会を前にして

ゆきちゃんは他界してしまった

発表会の当日

プログラムの二番にあるゆきちゃんの名前を見て  
私は泣いた

七番目の私の出番には 涙が止まらず

泣きながらピアノを弾いた

(以上 拙著「キウエイデインの回想」  
子どもからの60のメッセージ」より紹介)

かつて子どもが大好きで保育を学び始め  
ましたが、今は保育学から人生を学んで  
おります。



# 短歌と私

短歌を詠む私と日常生活を送っている私とは別人格である、という多重人格?と思われるかもしれないが、事実であるから仕方がない。しかし、一般に多重人格とは、一つの人格が登場している時にはもう一つの人格が出てこない、そうであるから、二つの人格が同時に動いている私の場合とは少し違うのかも知れない。短歌をはじめた十六歳の時から、私の右隣に一日中いる彼女が、私の歌人としての人格である。二人が共有しているのは時間だけであり、性格や生き方は正反対と言ってもいいくらい違っている。彼女は私が忙しく働いている時に「アクビをしつつのんびりして

おり、私が病気で苦しんでいる時には楽しそうにびよんびよん跳びはねていたりする。要するに、私と彼女は表と裏の関係である。したがって、彼女と私の時間は、私がどのくらい他人とかわるかで変動する。教師として、生徒と本気で向き合うことをモットーとしている私を、彼女はうんざり顔で眺めている。そのうち、仕事に夢中となった私が、彼女をうつかり忘れていたりすると、小さくなっていたり、錆がついていたり、話しかけても反応しなくなっていたりする。もつとひどい時は、家出をしたり暴れたりもする。私と彼女はまさに「異域同舟」の関係なのである。本気になればそれこそお互いがボロボロになるまで戦うことが分かっているから、常に牽制し合って生活している。こんな生活がもう十年以上になった。彼女が消えてくれたら、どんなに楽になるだろう。どんなに安定した安らかな心になれるだろう。短歌を詠んでいることを話すと、「いい趣味ですね。」とうらやましがられたりする

でも短歌を続ける理由、それは私だけではなく歌人と呼ばれる多くの人が心に秘めていることだ。それを嫌と言うほど分かっているからこそ、決して口には出さないのである。「やめようと思った時、短歌にしたい言葉と目が合ってしまった。だから、やめられない。」本当の自分・本当の言葉をいいたいとれくらの人が自覚しながら生きているのだろう。少なくとも、私にはまだまだ遠い道のように思われる。唯一、今心配そうにこちらをうかがっている彼女だけが、その道案内をしてくれるような気がする。もう少し時間ができたらつき合うからさ、と言いついたら、彼女が激怒した。「後でまとめてなんとかしようなんて、ムシが良すぎるわ。何倍も苦しむことになるからね。」つき合いが長い分、私には一番手厳しい相手だ。一日一分でも五分でも、怒り冷めやらぬ彼女に話しかけなくてはならない。これほど私を理解し、ごまかしのきかない相手は他にいないから。

左の短歌が、最近の彼女の作品である。「本調子ではない。」とは彼女からの伝言である。

おもいでもできる記憶はやわらかで手帳に堆積するひとの顔

平面でわざとつまづく心地よい春のかゆみにまみれる二人

逃げるのか? スカイブルーの空である 走って走って平面の上

私には長い手があり過去にある賞状を全部捨ててしまえり



常磐大学高等学校 教諭

## 秋津 由佳

### Profile

国語担当。16歳より短歌結社「かりん」に入会し、作歌をはじめ。現在、水戸と東京でそれぞれ月1回の歌会に参加している。



## \*1

### CAMPUS REPORT

## 4年間の大学生生活

常磐大学に入学して4年が経ち、私の大学生生活はとても充実していると感じています。その中でも専攻科目である「フィールドワーク」と、私が所属していたサッカーサークルの活動は、私の大学生生活の中で最も大きな糧となるものでした。

「フィールドワーク」においては、昨年9月に現常陸太田市である水府村に調査合宿に行き、現地の方々に生活や合併への考えについて調査しました。調査した住民の方々のお話を聞いていくうちに、私は将来、人の生活の基盤に関わり、お客様と長く付き合い合っていくことのできるファイナンス・プランニングの仕事がしたいと思いました。「フィールドワーク」がな

ければ、私自身のやりたい仕事は見つからなかったと思います。

また、サッカーサークルでは、立ち上げた当初は弱小チームでしたが、毎日毎日休まずに基礎練習やミーティングを積み重ね、他の大学のチームに勝てるまで成長しました。努力と協力することの重要性を学びました。

私は高校生の時に、単にやりたいことがなかったため大学進学を希望しました。しかし、常磐大学での学生生活の中で、やりたい仕事を見つけることと様々な経験を積むことができ、希望の業界から内定をいただきました。とても実のある大学生活であり、私の人生の中で有意義な時間を過ごせたと感じています。



サークルの仲間たちと。  
(写真2列目、右から2番目が上田さん)



人間科学部 人間関係学科 社会学専攻4年  
上田 洋介

## 保育士への第一歩

私は、幼児教育保育学科に入り夢だった保育士になるため、幼児教育の幅広い知識や技術を学んできました。中でも「幼児と音楽(指導法)」という授業は、学生が先生役と幼児役に分かれ、歌を幼児役の学生に教える授業です。1回目の授業で田中先生が、幼児に

語りかけるように歌い始めました。初めて聞いた歌でしたが、自然と私たちも楽しんで歌った事を今でもよく覚えています。しかし、いざ自分が先生役になり教える立場になると、幼児役の学生に歌を「教えよう!覚えさせよう!」ということばかりにとらわれてしまい、

田中先生のように自然な流れで進めることが出来ませんでした。この時私は、楽しみながら歌を歌えるように進めていくことの難しさを実感しました。

実習では、実際に子どもたちの前でピアノを弾いたり、歌を歌ったりする機会があり、とても緊張しまし

### CAMPUS REPORT

## \*2

たが「幼児と音楽(指導法)」で学んだ事を活かし、自信を持って子どもたちと音楽を楽しむ事が出来ました。

この授業は、他の授業とは違い、実践的で自分にとってプラスになることばかりでした。

私にとって「幼児と音楽(指導法)」という授業は、保育士に近づくための大きな第一歩でした。



実習先の保育園で。(写真中央が横須賀さん)



短期大学 幼児教育保育学科2年  
横須賀 香

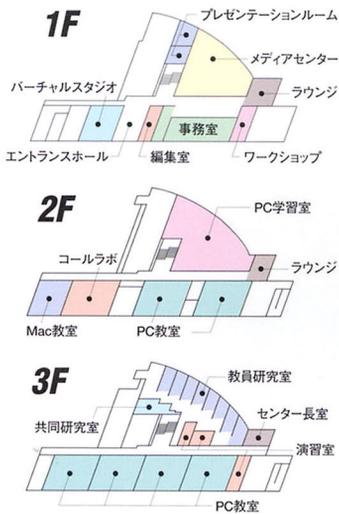
# Close Up Tokiwa

施設紹介

キャンパス内のコンピュータ関連施設を統合した「情報メディアセンター」と、常磐大学の国際化を推進する「国際交流語学学習センター」が、2005年4月と5月に隣接して開設。併設の図書資料館を含め、最先端の設備を統合した新しい学びの空間を紹介します。



## 情報メディアセンター【Qs棟】



### メディアセンター

CD・LD・DVD・ビデオはなんと8,699タイトル!! コンテンツも多ジャンルに及んでいます!



### PC学習室

PCが85台もあっていつでも自習できるし、無線LANだから、自分のノートPCも使えるのは便利です。



### Mac教室

最新型のG5が30台も入ってるのはスゴイ。ポスターを作ったり映像を編集したりして楽しんでます!

先端情報環境から生まれる  
 コラボレーションも楽しみな  
 デジタル体感スペース。

これまでキャンパス内に分散していたコンピュータ関連の教室や施設を、一カ所に統合。豊富な情報機材を学部や学科を越えて使用することで、関連する授業を効率的に進められます。また、本学に特徴的なメディア関連の教育に必要な最新機器を設置したことにより、より高度な研究や多目的に使用できるようになりました。

デジタルな教育空間であると同時に、CDやDVDなどのデジタルコンテンツが視聴できるブースや、リアルな音響効果が楽しめるポディウムなど、設置され、学習の合間にリラックスできるスペースにもなっています。さらに、隣接する国際交流語学学習センターや図書資料館の情報を相互に活用することで、より幅広い知の体系を築くことができる情報発信基地です。

コールラボやバーチャルスタジオなど、授業以外にも楽しんで使える設備に興味津々です。

### ワンポイントアドバイス

コンピュータ系とAV系、計6名のSEが常駐していますから、基本的なことから専門的な内容まで、丁寧に対応してくれます。

コミュニティ振興学部  
 ヒューマンサービス学科 4年  
 小林 良治





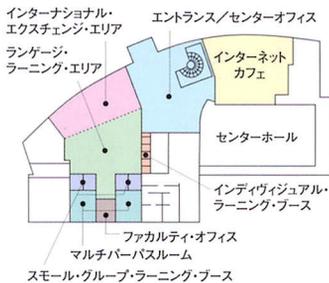
International Exchange and  
Language Learning Center



大学とは思えない  
モダンで開放的な  
空間で語学が  
学べるなんて、  
常盤大学の学生で  
得た気分!!



人間科学部  
組織管理学科 4年  
田所 絵美



## 国際交流語学学習センター【Q棟1F】

誰もが自由に交流し、  
目的に応じて好きなように  
語学を学べる開放空間。

国際理解・教育交流・研究交流の三  
つを柱に、提携大学との交換留学や  
海外ボランティア活動などの国際交  
流推進と、さまざまな形で語学学  
習支援を行っています。

語学への目的毎に、何がどこにある  
かをわかりやすくした新しいタイプ  
のエリア展開で、一人でもグループで  
も機能的に利用できます。外国人留  
学生による英会話活動や、ネイティブ  
教員とのトークタイムは学生の間で  
大人気。語学学習エリアでは最新コン  
ピュータ機器のすべてに語学学習ソフ  
トがセッティングされています。  
26万冊の蔵書を誇る図書資料館の  
ほか、隣の情報メディアセンターにも  
語学関係の設備が揃い、視る聴く読  
む話すの自学自習が一連の流れでで  
きるシステムになっています。



### Language Learning Area

英検やTOEIC®などの教材が充実  
しているので、語学のスキルアップ  
には最適です。



### Small Group Learning Booth

衛星放送が字幕つきで見られるし、  
防音完備なので同時通訳の練習も  
堂々とするのは、うれしいですね。



### Internet Cafe [LAVAZZA]

学内に1895年創業ラヴァッツァ  
社の美味しいコーヒーが飲み、無線  
LANの設備もあるのは自慢です。

### ワンポイントアドバイス

PCにセットされた7か国語の学習ソフトは、効率的で凝縮さ  
れた内容。学習履歴も残るので自分のペースで学習できます。



第35回 **ときわ祭**  
一般公開 日月11日



# Tokiwa News

トキワニュース

常磐大学高等学校と常磐大学幼稚園から届いた最新ニュースを紹介します。

## 常磐大学高等学校

### 共学6年目の成果 野球部の活躍とときわ祭

今年度も高校は、部活動の活躍と多彩な学校行事で活発な1年であった。加えて、それぞれの場面で男子の活躍が光った年でもあった。共学6年目に入り、その存在が大きく見えてきたのは嬉しい。

部活動では、まず、野球である。夏の甲子園予選で、ベスト4まで勝ち進んだ。創部以来、徐々に力を付けてきていたが、今年の大躍進は校内に元気をくれた。応援団、チアガール、吹奏楽、そして一般生徒達の協力も学校を盛り立てた。それぞれの立場で頑張ることの重要性を学んだことだろう。これが、自信となって今後の学校生活に活かされていくことを願っている。この活躍は新聞等でも取り上げられ、「常磐の名を広めた。そういう意味で野球というスポーツは、何とも魅力的である。」

野球部の他にも、体操部のインターハイ、国体出場、水泳部と陸上部の関東大会出場、男子バスケット部の県ベスト8等、日頃の地道な練習の成果があらわれた。これらも男子の頑張りである。

また、今年は、2年に一度の文化祭「ときわ祭」の年でもあった。「TO(ともに)KI(きらめき)WA(輪を創ろう)」をスローガンに開催された。2日目の一般公開日には約2500名の来場者があり、校内が賑わった。ここでも、実行委員を中心とした生徒の活動が目立った。クラスの催し物と同じようなものが多かったのは否めないが、何とか自分たちでやろうという姿勢は見られたと思う。中でも夏休みをかけて映画の自主制作をしたクラスがグランプリに輝いた。閉会式の「この感動を忘れずに」

の生徒の一言が心に残った。

入試広報部では、生徒募集用に「T-Color」という広報誌を編集している。年間4回の発行で、中学生や保護者の皆さんにより常磐の様子を知ってもらおうというねらいである。個性的な生徒の話題、各種行事や部活動の活躍など「学園案内」では紹介できないその時々話題を取り上げているが、その際にも生徒の生き生きとした姿や笑顔は印象的である。まさしく主役は生徒である。

秋には、1年生が登山で心身を鍛え、春には2年生が心待ちにしている修学旅行がある。そして3年生は、いよいよ進路達成にむけて最後の頑張る時がやってきた。温かく



見守つていきたい。

常磐大学高校として船出して6年。もうすぐ4回目の卒業生が巣立つていく。国際教育や学力向上推進のプロジェクトも立ち上がり、さらなる発展のステージを迎える時がきた。

入試広報部  
教諭 舩井 節子

## 自ら考え、 生きる力を 育むために…



常磐大学幼稚園では、「人格形成にとって大切なものは、すべて幼稚園の中で学ぶことが出来る」ということをモットーに子どもの自主性、創造性を重んじた「遊びを中心とした保育」を実践しています。「遊びを中心とする保育」は、ただ一日中遊ばせておくだけの「放任保育」で

はありません。子どもの人格を尊重し、行動の自由を保障することで、自らの考えと行動で問題解決をする。言わば生きていくための力を育む教育実践です。現場での教職員の役割は、子どもが自らの力で育つ、その手助け（援助、助言）をすることにあると考えています。

## 水生植物園

幼稚園の遊戯室裏には、「水生植物園」があります。春には、ミズバショウやザゼンソウなどの希少な植物が花を咲かせます。

また、水生植物園内の池には、ザリガニやアメノボ、ヤゴなど園児の大好きな生き物が生息しています。常磐大学幼稚園では、自然から学ぶことを大切にしています。



## わくわく チャレンジ

常磐短期大学幼児教育保育学科の体育の先生に子どもたちの大好きな運動遊びのお手伝いをお願いしています。



## 第36回運動会

2005年度運動会が2005年10月2日(日)常磐大学の見和グラウンドで行われました。今年度は、諸澤英道理事長をはじめ上見幸司常任理事、事柄澤行雄大学副学長、江波諄子短大幼児教育保育学科長、濱崎武子教授、中原経子教授、田中東亜子助教、山路純子助教、鈴木康弘講師、山田隆士常磐

年少組のボンボンダンス、年中組のフープダンスやリレー、そして、年長組の組体操やリレー等々。今年度は、当日までの保育の流れを記した『運動会に向けて』という小冊子を事前に保護者宛に配ったので、運動会までの保育の流れが良く分かり好評でした。とても素晴らしい運動会となりました。

大学高校副校長、松丸令子元園長、小瀧園雄前園長代理、…沢山の来賓者やお家の方々に見守られて盛大に行われました。開園以来初の午後までのお弁当持ちの運動会、家族揃って楽しめたのではないのでしょうか。内容的には、



## 表紙説明

### 情報メディアセンター棟

通称Qs棟(2005年4月竣工)。地上3階建て延床面積3,565㎡のこの建物は、これまでキャンパス内に点在していたコンピュータ関連の教室や施設などを集中・統合することによって、教育・研究の利便性と効率化を促進するために建てられた。

1階は各種ビデオ、DVD、CDなどを視聴できる「メディアセンター」を中心としたメディア関連施設のフロアとなっており、2階、3階は「PC教室」5室の他、「Mac教室」、「コルラボ」、学生が自由に使える「PC学習室」、「情報系教員研究室」等々、PC関連施設フロアとなっている。



イラストレーター／佐々木悟郎

## CONTENTS

- 1 特集 座談会録 研究教育支援の取り組み  
**常磐大学のめざす「情報化」「国際化」とは何か**
- 7 **教員エッセイ**  
教員から寄せられた研究分野の魅力や逸話を紹介
- 10 **キャンパスレポート**  
学生生活の中から寄せられた声を紹介
- 11 **Close Up Tokiwa** 施設紹介  
「情報メディアセンター」「国際交流語学学習センター」
- 13 **Tokiwa News**  
常磐大学高校、常磐大学幼稚園から届いた最新ニュースを紹介

**常磐** TOKIWA  
Feb. 2006  
vol.6

発行日 2006年2月  
発行 学校法人常磐大学  
編集 常磐大学 企画課

〒310-8585 茨城県水戸市見和1丁目430-1  
Tel.029-232-2511 (代)  
<http://www.tokiwa.ac.jp/>

法人広報誌「常磐」はvol.6より誌面をリニューアルしました。  
本学の研究・教育の内容をわかりやすく紹介します。